歌林一枝

二

内閣文庫

和書門
類
二五八三九 號
六八 函
一四 架
三 冊

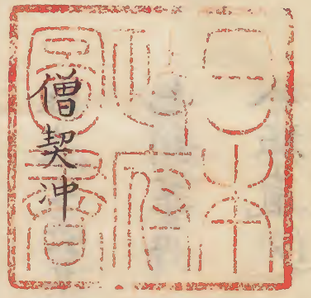
内閣文庫
和書
二五八三九 類號
二 冊
二〇二 函
二 架

内閣文庫
番號 和 25839
冊數 3 (2)
函號 202 90

国立公文書館
National Archives of Japan

歌林一枝巻之二

下河邊長流　僧上湛水　安藤朴翁　僧慈山　三浦某　大石良雄



隱士石外　犬女　扇作某　挓女　小野寺秀和

僧宗知　杉若柯求　辻女　惠深尼　池永意三　秀和妻

国立公文書館
National Archives of Japan

吉田兼亮　神崎則休　間光延
光延妻　前原宗房　村松秀直
原元辰　芦野常成　木村貞行
横川宗利　岡野某　無名氏歌
羽倉春満　無名氏歌　遊女小紫
貝原篤信　強盗之長某　僧幼意
讀捨子歌　乞利某母　田邊通直妻
道明法師　八塩嵐夕　竹内治安

馬杉　吉益東洞　関東武士妻
僧慈雲　萩生雙松　藤井季康
伴益道　平瀬長矩　大淀三千風
僧定月　鈴木某　室直清
河瀬菅雄　服部元喬　山名義豊
板鼻検校　京極高門　磯田正隆
宮田永悦　林直秀　捨子之母
九歳之童　林重澄　僧典海

圓珠尼　小森俊経　有賀長伯
隱者之僧　僧涌蓮　谷崎永律
鈴木重規　英信香　園女
隱岐直清　一松拙　安藤為實
藤田某　谷口元淡　藤原信易母
拾悅尼　遊女淺尾　遊女苅藻
百合女　真知女　小山守中
田付圓方　大黒屋某　僧似雲

仁木充長　細井知慎　松井幸隆
僧釣月　伊藤維楨　並河亮
苗村丈洞妻貞信　佐藤直方　澤市
手車翁　等無軒義堯　江嶋女
奥山交竹院　遊女恋山　遊女小薩摩
筍齋　甲斐國農夫　僧慧覺
池田季澄　石山寺櫻之歌　清水宗川
和泉堺盲童　園田幽也　立羽不角

阿部遂良　　知見院

相澤榮女

欵林一枝卷之二

下河邊長流は。通称孫六といひて。和歌の道ふかく。其事ハ学ぶ志ありて。経歴ふ隠遁して貞享三年。とし六十三にして身まかりぬ。家に集あり。学ぶあまねく流行れるもその間述懐のこころを。

うたがひのこころふかけれつ枝もたをれぬ水ふ身ハしばしばかり

ゆびをつゆあふけでいとで。なるとも本はさるとかとやとのの葉

ちるを学の集ちるをとうたに。むつかしきもの人のまなぶ学

そこらゆくゑもしらずぞかしなん。

難波津のながれにすみつるあしげの末は世にくだちてうたをこのむ

この人はあはれあし。○林葉累塵集といへるものあまたの序はおのおのいへるはこのむかし世にかくろへる蛙

契沖が山にこもりてよめる俳諧のうた。

の才あるそのみちにくらきこころもなかしこにいでそこなへて今のこころその才にまし

世の中にあるこころは山たかきのすぐれていでたしてけぬる雨

しるよし。猶このみちしあらむしてもなることをひとくにふみしを世にしらしめ。此集につけてもかくれなし

としもあらそこうて。

難せんもなをおもふべし。かれらが人のこころはるかなしきことどもいふものにひて。いかさまにもある

よそにこえてようつこえてこの道にしたがふこの山ぞこのうたかはれる人

口にさまよれどもいまもその口まくもあらん。出雲にしたるとて。またしもしかうた言の葉

山家のこころを。

そうぶらむかこのうたにすぎにしなくてそこれを此人にてかはすべし。

世の中のうちはさびしきをされしくもよしれ。絵の夢にかへりける

住山にはなる人をみつくもわざこぼしのおもひいでぬる

わが袖のうけを山風にふきみてうつる庵の月ぞ出たき

さしわれど花より外にこころなき人にあしからぬ山田ぞと

われこの谷をたてまはしてすまのくるしき山る葉あだけよきうら常

僧契沖は津を空心といひ。俗姓は下川氏なり。元禄十四年正月廿五日。

六十二歳にて寂をまきけり。先に難波の津にすみし圓珠

菴をむすびて。この人内典はいふにおよばず和漢の学にくはしく

して。ことに和書は著述注解に多きこそは。世の人まの知るところなり。縁

称も下河邊長流にまなびてあらかた。集あまたとこそなれ。

このうち山家はいとをある。

つまれくも都の方はあさくは風のとよそれはなし雲

山里にまねくつましとめてしく花より外の香にほひて

山川のかはらをほりて屋をりとをゝ[illegible]

迷惑のこゝろを。

われらはあしたは下れ一ふしのあるもあるべき

山ふもとをわたられぬこゝろ[illegible]

世の中のゆるぶやう[illegible]

信濃水ゝひしい。江戸池の場ゝ法論寺の住僧ゝ[illegible]

ゝゝ長流ふまゝて[illegible]

あやゝ[illegible]

又あ付[illegible]

[illegible]

ちきゝゝて清ふゝ[illegible]

信宗初ゝ[illegible]

下河道長流があ[illegible]

ある。

[illegible]

[illegible]

るゝゝあ[illegible]

ゝゝび江戸ふ[illegible]

義國より[illegible]

[illegible]

かくとふ。

けものこそこゝろなきものなれども海のうくかはるわざ

隠士石外しいひしゝぱらしめ長野宗安と甚田伊豆守信幸小仕

一人ぞ。剣術は諸流をこゝろみ。まことにまぎれなき

神道ものもこゝろいる。禅機をもみてにこゝろ行むこゝろ

ゆゑしてよある行も多かるべしぞ。そのゝ花のこゝろ

こゝろはこゝろふこゝろねもなく花やはるべて山ゝこゝん

人は家をて庭の樣を。

一本をばこゝろふこゝれこゝはばこゝ山こゝ花ゝこゝろこゝの

隠道の後、たゞ右衛門こゝしこゝ。正徳二年ゝあるこゝを

こゝろふ七十二歳にて身まかるこゝ。

松若行求こゝしゝ。松響堂（松中ゝ）猶しゝ。ゝがいこゝ

なる人ゝて。こゝろ行むこゝをこのゝ元禄二年こゝ七十ゝて

卒こゝ。これが身まかるこゝの春こゝ春こゝ

いゝゝこゝ身はゝゝしこゝこゝいふ

春月迫こゝ題こゝ。

ゝこゝ夜はあれをしこゝあるひこゝの中こゝ新

古郷春月を。

里人あれこゝこゝ山こゝ月こゝ

神無月のこゝ甲斐の国ふゝこゝ

をきて。

むさし野にはかりの原もかれのこるをはらふを[illegible]の事

信濃の國にてよめる　姉の身まかりしころ。

こゝろはなをかしひしに露をはかけてもをえてやこゝろあやまりるふし

田舍集に略之澤の春は柳のこゝろふ

いかしこの枝はあれはいとるんしきこゝ澤の春ふそてきん

江戸人柯求とあるはこの人なるべし。

安藤右衛門は丹波の國千年山の隱さるかの山はこゝろもふ八景あり。（この人は[illegible]）

（[illegible]）

をしるし八景はこゝをもこゝろ繪かけるこの時は歌ふ

ふこゝ山やはのこゝろひをえ繪はられぞふはれこゝ人のこゝ

まこゝ五は為章ゞのこゝ山はこゝをこゝこゝこゝの内ふ

まこゝこゝこゝこゝ山の名ふかけて君をいはる系代をこゝ

水戸の義公。このこゝをこゝこゝえこゝかこゝん

山は名のこゝは君ふゆゞこゝをこゝこゝこゝ抜かわれん

犬女こゝこゝは伊勢は國ふこゝこゝ行こゝは女こゝこゝん性こゝ

こゝ。和歌は道をこゝこゝこゝ後朝意こゝる題ふて。

こゝこゝのわれはこゝのかひこゝ今こゝはこゝこゝこゝ

つゞこゝ十三はこゝひこゝて。元禄十年の春身まわこゝ[illegible]後

世のこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

[illegible]を松雪とまゐらせられけるところ松雪とよべる
題をたまはりて。[illegible]。
はじめ志賀の[illegible]にまゐりたりしに雪にはばむの
[illegible]道のまやに[illegible]千念とまりけるとて。[illegible]合佛
をとなへて。
[illegible]ふれるばかりよるべ[illegible]なるもはじめて[illegible]多
辻堂にいたりて。久保田[illegible]家[illegible]が女[illegible]十歳のとき松雪とよべる
題をたまはる。
[illegible]付[illegible]ふる[illegible]松がえも雪ふかまさるはるのやま
五位奉納和歌[illegible]元禄のころ[illegible]この人[illegible]

をあはれまるとのこころふ辻堂にこの一首をおもひいでたるの比
世ふかきをしるべしこれを同じくしていけるとき女[illegible]松雪
をとりて世ふりてとやまれ[illegible]ものがたりさとりぬ。
僧慈忠が字を毋三[illegible]唯忍[illegible]弾[illegible]道徳あるべき人[illegible]の
夢もこころふ長じぬあるいはこころ[illegible]書もとくるべし野山州集
ふ詩偈ぐ多くはて。[illegible]集も一巻あるとれ[illegible]
ふ学ばずしてこれを[illegible]付ふ[illegible]て述懐あるハ経文[illegible]述
しこと多し。この内ふ無我無造無受者善悪之業亦不安の四句
いぐふりるぬ[illegible]ハ[illegible]移毋も風ふ[illegible]
心を師とせる人[illegible]。色即是空[illegible]義をひがさまふ[illegible]

法の三葉にも怖畏をまぬかれよとていと悲しさに　一首
いろも香もむなしきものとしれぞかし花も実もしらぬなからへは
西方にまいらんことを
吾願は花のいろにそむべてはこころもひの蓮によそふるなれ
法華三昧をおこなひて戒根清浄の夢を感じけるぞ
いまは法もひろよりあまねく目ではもあげけば玉のうてなに
この人元禄三年七月三日に亡にけり
扇作ることをわざとせし楽ゐるものは京の三條にあまりかれが夫妻は
日ごろ中あしくあらそひめしかるひとつとしあるとき小刀の時
のあるされ。

はらつまもあつまりげにば妻にすゝめぬる身を
このよの世をあきらめて　厭離にも違して　こゝろ二十ひ
をすし偏につかへるも後生ときまへりかなしひてあはれしおるぞ
夢るより又或妻にいふは都の何がしが娘いかがむつらとむののしりたに
いまだ法華あつきてそのむこ家を出しけるとぞむまあはれなる。
はらつまもよせるはろうあへなくさく妻にすゝめぬる身を
この頃によりてみなびりかるしこの後によれぞこれはぬすしかる
へまいりけるすゝしめるうちに後は従もあまるかんとおもひ。
恵深比丘尼といひしが相模国小田原の西條寺に　火定にいりにし
住持は和尚なりける。

おなじくもこころゆるさるあまふね舟さうの波はあんぎうの
恵深くあくびをくしふ
ふかくさうひも捧もいくさをさう浦の浪のうつふすをそて
三浦源右衛門よりひしく人ふくしく酒をこのみおらしく。ふかくこと
をもくまれぐ歩をし場も。法弾をと酒徳院醉翁樽枕座こいとも。
延寶八年正月八日月まれるもぢれぐこの人ぐあけれふ酒をけ。
けらしやれ世くれどこふ武術ふまれ。無眼流の剣術。この人
まもらまれるこいふ。それが婿世けるこい。
こころの人ぐ道ことかられ。ぐの心らこうこれぐ世ぐ酒
この餘をられるくあれぐけなぐ。

梶女こいくるふ文稼のこころ京ぐ祇園ぐうるこをて。第居ぐいくるこを
うもるあるうるぐ。心ぐくやかくふしくいやかくいけるこ時
よも父くふくく孝をうくこふいくるこもいくまくこびふ。
くく相法ぐふこうをもの日ぐこあやもくふ人ぐこうあるげ
うるふふくく祝ぐこうぐくるこふくていけくいくるこ世
祝も学ふけくるかれ十四歳ふうるくくの者ふ崇暮名く
いふくを。
こひくくもあぐれかるこ海ぐこうあるやこけうん
又この秀逸の祝くて人ぐ口ふあるふ。
雪ぐうぐ梢ふこめくあるやうんくくぐ霰のゆふぐくこ上て

また立春のうたに。
はるけしなきよあしたにはけふは春とおもふからに風の音も
あらたまりて清き心ぞふきそよぎしらひられど。又はあらしの
すくなくて清かりしける。
ふところよりみをさへ清しければとくとくもえてしたはあふぐ扇の風
また扇のおもやうに。柳のすがたに女は琴をひきてゐるさまをかけるに。
いそがしき世にもあそびたる青柳のいとあひくさしたへくもる世を
又ある女のかしらにまきて物くれる歌に。
八重桜あしたへかてもかざしは音そえて世にのこしける松ぞ私
とあるしかへしに。

おろかなるわれぞかしこくもあふにまかすに海士の小船を
池永意三。儒学者なりけれ世にすてかつらがし十六になるときは水戸黄門
公へめし出され。和漢の書萬巻にまさりてとさいかしいゝ人
にてありけるか。仏縁のありけるにやある時延命地蔵経をよんで。
そのうちにある世は無常をさとりて菩提心をおこして大守へいとま
をこひ給ひて世をのがれ。そのありし号節と名をあらため。容を
桑門にかへて。都のかたはらに。童の風車をもて遊びをなして。
まへばまひて扇にまかせ車これやわかの竹のありさまなる
とまあるもの風車でらもいとまをかへて後勝尾山二階堂にこもりける。
九月のふるさとにむすびかりしあまる車あまて。火宅に入ぞしとて。薪

はやせ我ろうしよう香煙を出しなを相図に火をかけよとやくそく
し。その時は辞世はかくこそ。
世は荷をおろしひとりかへりけり鷲尾山よりそのまさめにハまさかくれなん
とよみて いまめ志づかに念佛誦経の声すこえしが人々
煙をみて火をかけしおしもともに谷ふかうらして参宿のもの共
同音に念佛して。俄に事志ずまりてぞありしとぞいへりしに。
たれもみな香煙をさゝげ。右の手に念珠をもち。左の手をのべる
これさまざまにとりどりに初儒学に誉れありし人の心がけるはいはんかたなしといふ心
大石内蔵助良雄が事蹟ハ。世人よくしる所なれバ。これがしるし歌とて。
その言葉ふるきにいへる播州赤穂の城を人にわたし筆ごころまさにあれ

てぞむかひにむかひしまいと。こうびをかざり立ワかれけるときに。
憩涙袖にとゞめがたく。むねの心中の思ひをのぶとて。
身はかりそめし君のなさけにあふがれて浮しまざる也流る
こゝろハわれよりぞ。まつからまで。ものちあまりて。
つひにハ袖ぬらさぬワかれ。かつ志のゝ水茎のあとを
芝の泉岳寺へ。しのびまいりて。志るしいにしへよそひを
なるらるとて
立ぬるしも思ひハ身ハきえてつゆき無ふ名にかゝる雲なき
小野寺十内秀和。大石主税をもうしひ。元禄十四年長月十日あまり。都を
こゝをいでし。

おもひ出づ音羽の山の梢ぐらみいろを別れし袖ぞくもりよ
二代にそふほだしの身ならねども。
ひとりあやまりしにあはれなるを始としてよろづにほだされて君が情を
忘れし恩愛にひかれ老たる母や。妻子をもすてゝゆく情定めなき武蔵
野の月の影ぞとをめにかけて。いそぐ旅路なれど猶しらぬあはれに。
まよひゆく心を情を思ひながむるにおもふにことのほかさむは
月はうき世の有りやゆくに吟じられて。主税もあはれを催
し感情にたへかねて。かゝる思ひ出る故郷有母秋風涙旅館無人
暮雨魂といづらひに遠ざかることをなげく今の情などはべりる。
道すがらはなしたまひの返事として秀和の妻よりよろこ

てんごこそなる。
草のあしたのふ涙のしぐれ来ていとゞほどきこゝろの外もなし
かなしかりして。
かゝるままありてかくてかん秘らす旅ぶふまうゐを九年まへにひとりきりめぐを
今ことまれにおもあげけてふみみまりはべるある。
いまはやよこの外にくるもろうりけるも何のまあるて雲みむまずん
あづまへていらる世の末は道をなごみのまゝに花をすまづてよろしきと
小野寺秀和の妻。みやこにおもきしが。秀和父子いまはなき人となりしをきて
そのゆゑを思ひ。京の本國なかりしを自害してむなしくなりけるに
とゞめかねてさるかなしかりける。

はるやまのこしまつたんのあをいなびかりこの世ふやのひかりかな

うつくしやなのめのらふ菜をめるはるの菜ふけるかな

こゝ元孫千あるを立ちて。小春十九のこゝろうとぞ。

富士見峠　兼光。近松勘六こゝろ

て遠海を寿をこゆるこゝて。

九重ぬりのををていぐるはるくるめ四代ぶあふさうみ七き

小夜ハこゝ山ゆ。

夜をこめてこえゆ旅のそられや三ぬ山ふよの中山

薄雪山のゝこゝをうぐめて。

ウれ雪ふるれ松ぐ〜雪ふるれ白雪

清見ぐ〜て

こゝ雪かこゝもこゝ〜清ぐ月をとぐめ〜ゝのこゝ

ゆひをこげ〜海ゆこゝるゆ。

ワこゝハ人ぐゝみまるぐ〜佛ゆこゝ

あるひハ云ぐゝハ人ぐゝふこゝ何ゝあゝふまゝ嵐

ゝハいゝるこゝふゆ下句こゝかゝ。

神保佐五郎則佛ぐゝある。

人ハこゝいゝぬこゝをゆ振ゆ人ん世ゝ名ゝ口ゝふて

人ぐ世の道ゝワこゝバゆこゝゝ

この道ゝワこゝゝハ芦野常成ゝ。

間喜兵衛元延らるるに。

いとめでたきこころふたりともに此のをんなの身にそなはるさ

ばりひとよ所わかる道の筋まことうるはしき夢ハ法ばなり久敬

吉良義央をうちし後。その形ふ鎗十本ばかりあるをもて元延の名あるを

まぐらふ短冊をたけ重元延の名あるを二

こゝろをいさましくんもれ山のうぐらある世ハ忘るゝしるしぞや

いとつるぐ、神儀別体にうるて。

あけさらまゝの道ハ山もんびふ雪ハ消るも

間元延が妻芝の泉岳寺にまいりてよげさるあるをかくらある。

君がをもふこゝろうるさもれ山の金をもて名のるるる

元延が子重次郎光與が妻も此ぐ〳〵ゆきて。

芝の下宿にてもれ山の名こそ雲井ふ立ちわるれ

光與くるもの向こて。

ふるまもうくゆゆしきまのうの名もえぬ芝の下道

ゆく、大石主税くして。

名ふしゆふ石ふたつ立もとれ山あぐ〳〵力ばてうるる

前原伊助宗房も播磨の國小野にふるこゝろふまるる法のすゝ

ばるる山のこゝふ。

降つのる雪ふ世乃こゝろ八草墨あゝ切ひ降ある

村松喜兵衛秀直がうるて。

今のもかくぬひとつをうしうつしたけ隠れてもこゝをみだれん
志るのもありいきさぞいふもあるよ中ひとふいさ待えてくる君の楽き

原惣右衛門元辰。あふ世の春にたちしに感じて
ゆりひきやりさしそうつ春になりぬしくて峯おあゆき行かまみんとハ
かねてよりまことしるしに志にせんく人ょういふぞ先生の山道

茅野和助常成がよめる。
あめたちおろゝ、あふじる子勢くさぶれて世しげ修氏べふうつきさもおへバ

木村園右衛門貞行がよめる。あるひハ近松勘六も以て。
おもひきやつがのおゐなのこうらなでかるころ波み縁にあふとき

横川勘平宗利がうへに。
なそしバし先生に相ひくハあまをあるもまつさ下かけて道しるべせん

岡野金右衛門包秀がこれ
人は世乃道しの教さまざまあるも誠の道ハふたつなりとまた後き
かくふれまる浅野氏の家人赤がきハ。そのこゝろもまつしくまがくて文
詞は何も深ろきもおあされどころみおもひのあまりまふまてらわ
そおへしるもおろれど。人をして感ぜしむるもおあり。ことに一文字の徳と
何人はよあるにわびその作者といはず。詳にをさだけ。世の人は口碑にある
こゝるれバこゝにはせあ。慎言語以養其徳。節飲食以養其體。事
之至近而不繋至大者莫過於言語飲食也
かくまんて先きことは志るれぬまゝ見てしかその跡のつたへくし。

羽倉齋宮ハ荷田春満或ハ東麻呂ものかけるを法南の稲荷の社職なり。
あるものゝ家をゝ事ハ来るなりとゝ云ふゆゑなり。つとに國学を唱
て世挙て信ずるところ人多し。
有ふあるべし常に之をしるべからず。
りよくれんとゝの関ハ何なる深
行がゝやいひ人多しあるべしゝ。
無用のゝをよるこの二ハ川道無用。
いかにして教るゝも迷ふべきゝ道ふみ入る身なれど
この二ハ法法を用ふる事を。
ものゝふとゝをろをふるをんゝ
この三ハ徒雖子無用ゝ
むれ身ハ衣もるゝ
遊女小紫ゝ
京師ハいづゝ遊廓をゝがある付人ハ
楼ハ何なる小紫ハ何なるとこあし
しづ。幸國ハ
ゝを繪ゝ
ゝ絵ハ
ゝかゝ文ハ
ゝひゝ。先生ハ常に人ハ

この絵のこゝろは。
玉琴は引はあまたはなれぬ。誠あまたの人をはぐくむ人こそ
あるれなれ。又はつゝましきまゝに男はあさゝしきあはれ
われのみはかるゝ事はいかくの佛力自靜なるべつるゝ
いとんもやがてまこと野の露ともろん命かれる
きはひ。人もまこと。遊りあるべきゝ（来）。
いくさをのめしたこゝろ。　都の遊女より野
　　筑紫の學士貝原氏ふよまる。
こゝまこゝろやはなるこゝ。篤信さこゝも篤行の人なるこゝ
こゝしゝ何とのかゝる事をこゝけゝるべ。

貝原篤信八字を子誠といふ。俗稱八久兵衛。めに弼軒
號ふ益軒。あるこゝをこゝ正德四年こゝ八十四年身まかりぬ
この人著述の書多くして博識のこゝあるこゝ世の人乃
こゝこゝろ。彼もむこゝもこゝ。ねがはまこゝ。
こゝ辭世のこゝこゝにはこゝる。
こゝ方八つまこゝろはこゝてやこゝあるまの中をこゝる
強盜のこゝこゝこゝれこゝひこゝの經歷ふこゝ。一こゝ紀伊の
國こゝ藩主ふ。ふ。ゝ。俗場の客ゝもをかこゝあこゝんこゝかこゝて大師
の廟所ふこゝこゝでこゝしゝ忽然こゝして感動のこゝこゝ地こゝ
こゝこゝこゝこゝあこゝの行實をこゝのこゝかこゝてこゝこゝ歳をこゝ

かくて懺悔ぎょう一首をよみいでぬるものこころはおこりぬれば
なくなりやすらまるものなり。
そもそもむかしの行のあるものはそもそもこれをおのれ
僧如意輪ひとりぬ。いくばくの徳のきこえあるべき人なりとぞ。あ厳尖の
僧侶をこれをもしるべしがそれをのいるとて隠者になりぬ。
そもそも同思る山中ふるのもの。林のくさ。あふ一路をたけ。ぬばたれ
草菴をかまへて居をしるるが。学文ふかくさびたるかぶ
寿ねがさるべて。道を論ずるものかしがたく。又ふかく学人
りぬべ。あ付信業をしるべきかぶ。方もろきさ法ふ二三間
さきうく二人あまるの行垣をゆひをきれば。いとうしなりひれば。
やがてかくこころをゆるぬ門ふいるをあれば。例ふうるまで戸もかをを
ゆるれば。事問をぬゆ。ゆりひ。門ふむ。ひとりをれば。古き木のれふ
一首ふ歌をかきたけをきしるのうた。
仏神のまで修を陪ぬ。道あれば。をとふ人あ
いるる者のようなん。道ふるるふいとなるを捨しをろ
あるて。よりぬるのをてれ。ぬるをるを
をして。
あれをう夜まにをるをやむを毋ふるひねの寄ぬん
ある仮ぬこの歌ハ。霊元法皇のあをハされ一歩歌をしるをる
やさもあんふ。こるふをを〈るのあ。又宝暦のころ捨ををあるこ。
ぬんをを〈ふ。ふをを〈るのあ。親のさ〈捨るをてを
ぬれを冷泉の月をみるをるを。

毛利兵橘といひし人の母は。元禄のころの人なり。うたよむことにすぐれ
たりとぞ。新百人一首にも名をいれられたり。そのうた。

あさましは先やとむかし見し人をまつ人ハ今はかげだになかりけるを

霞関集には。京極氏の家の門が母にてありしといふ。これのまことにしられぬ。
こや人は世のあはれさ悔るを。よくよくえらし哉なり。

田辺通直が妻。かれが國にありて。その國の名あるところところを
ほくしてよまる歌のくらふ。

東路のみちのくさへもこえあれど春にはさかえる霞やらん
この婦人ハいとけなき時より歌よむことをこのみたりしとぞ。
鶯はこゝに入つるをこゝちよくてなきたるといひけれど。
鶯はこゝにさかれしるうちに雪はふるともいはぬこゝろひきぞ

道明法師といひしハ。その人を詳にしらず。ある年の春のころ。ちかづき
なりける人。法師をとぶらひけるに。ひるまでのとゞまりしかば
なりしが。かの法師が庵室ハ。ゆかしかるところに。人はまれなりとおもひ
さびしかる所にかくろへん。

やよひまで春はすぎなんそのいにのおもひのかずにくはゝるる
まさにいろあるはなによそへるらしや。

人よりもげに身をしりしぬれど世にあるとてもことなりけり
このうたにて。法師のこゝろざしぞありしハさぞ。世の人の中にはさらに
あらまほしかるものなればかのいまめかしきもなきあはれなるをかし。

八塩嵐夕といひしハ。同志のなる人なり。それぞれのこゝろむけたる事

なほ人々ゑてそれぞれあるうちに
をれば〻こゝらまでもする世にはまれなる人やうん
吾〻ひが身をいさめてもかしがましきものかな
かゞるの事ども世ふるまふ
竹内治安といふ。伊勢國日野郡の人なり。唐物屋治兵衛
とひしが後入道して治安と號せり。この人いけるさま
ゑびのごとくにふくらしてこゝろむきをみるに年
ちかきのごとくなるゆゑ多くは後ゑふるまひ中院
家ふ馬をおくるにはる所和歌の浦をとまりあるべやどに
いでゝるに。

かゝるやうなるものとてやどかるる世ふあり和歌の浦波
中院家ゝるべき歌あるべし。かゝるべかりしの題をいだされ。
こゝにまして點をこひしいでゝ。
馬杉ゝひとりとまりたる。
嵯峨嵐むろぐ〻春ごゝろ花見ふゆきてあるべき道のあり
あるゝるものなり。京中をあゆきてくるゝをとし。
ゝゝつゝ時ふ。
松宰相重季卿人中あるゝ家集も有。
そのゝゝ世ゝにゆゑ定長者の孝ある人ゑやばゝふかを
ゝあふ法ふるをとけゝる。餞別ふ。
ゝゝゝゝねふ法ふる道をこゝろまんどこゝげ東所の旅

老子經の車をかくして乘るべきことを。
かぐれば身はをぐるまわれもの乘るべきを心得
べきなり。

老子は來こうるる身はぐわいまいまより見よひの新
吉益東洞は醫術は長して一家をなせり。世ふ
るべきこうる。如何は何はいさぐりしぐ。ある人は隨
筆をえれば。この人は詩經のこころをあるべき
やはぐ屋はれ。荒は春まるる妻やこうんるや男ふん
國東はまる武士ろうして。その名をはるえひいはのこるめ
あるべんかの武士ら妻とるあるべくしてそうの家をいまんと
いひるはまるも。兩のいく津あるべれば。兩やめるかんをい孫とりひれ
ば。妻のまる。

ふべ亦れふべふべ陣ぞうるものかいる神ろるべだうて
この欲はるべうるべいと長ふはりひ。陣ふうるべりてるべうるべて
ていべむはまりるべうるべ。

僧慈雲ようひ。ふゆ東殿ふはるべしぶるべ凌雲院の
僧西と諍論のことをはるべ。そのあるまひるべぬ事ども多かり
しば屋ぐ罷るべふるべ。流刑ふ定めれ。八丈島へ配流をる。
されはるべふやせざるべうるべて。死るべるべまる。

[illegible]人あり。[illegible]あれをけづりとるにおよぶ。風
[illegible]萩生雙松。字、茂卿。本姓を物部と云。俗稱惣右衛門。經緯と號
し。又蓬園と云。享保十三年。六十三歳にて身まかる。この比
[illegible]ことをもこのたびあつまるなり。ある人の真蹟の
詠草を[illegible]をえんとて。寄松祝と云題にて。
[illegible]
かくらぬ国はあらじみくにの代もいさしげる松はいとはふ
[illegible]の祝さてゆるもるれぐさをきりまふはやあ[illegible]述
懷をよめるうたにて人はうもれ
[illegible]
[illegible]月のうたにて神のあめ降ぶん
[illegible]ある人はこのうたは神澤吉保の夫人は一周の忌辰乃時よめるいま紙真ちふるの真
蹟もあるとぞ。

藤井季鷹。好の名貞鍋。忠菴。玄逸と稱し。懶齋。伊藤子の號
あり。通稱玄蕃。後勝藏とあらむ。京師ふれる。この人も物学
篤行のうたえあるて。著述の書もくるべし。そなぶ松欲をあつ
め。讀書餘吟と題して一卷あり。その内ふ書五種のうたを詠
せしうちあるうたを一首げ。人はうををうふはやあ大
時の三經領のうたを。
こぐうえばよりてまて思せうたむのうる光のそをけくして
論語爲政の篇不違如愚。
物[illegible]あるうたにて道しあぐらひとふぐを言の葉に
孟子公孫丑人皆有不忍人之心。

てたのめてふしれぐ云てふこゝ出て人ゝこゝろちりゝ紙

周易飛龍在天利見大人。

あふけ人雲井の彼乃時をこそ思ふ佐を

詩經周南関雎。

ゆゝしも楽くふゝしみゝ乃ゝ佐あ乃ゆゝ蒙ゝ乃ゝふちぎゝて

書經堯典。聳降二女于嬀汭。

ゆゝこゝ乃ゝ乃中の乃ゝ佐ゝる雲皆を出るけゝるやゝて

春秋桓公十四年無冰。

ゆゝけゝて来ゝぐゝこゝろゝゆゝ國乃るをゝふいゝぐむぐゝ

禮記曲禮毋不敬。

ゆゝけゝても夜舟こゝ江のゝをぢゝ浪乃佐ゝ見あゝぬゝるせを

伴益道ゝひゝいゝる人ゝゝや詳ふやゝ紀藩ふけゝゝ人ゝゝ

し風流の道ふゝけゝのゝ小ゝ歌佐集を桂枝題ゝ。ふゝを

あゝもゝのゝゝふ。日野大納言広資卿。和歌の浦乃芦ゝて作れる図

扇をゝてゝまゝゝる。

和歌けゝふゝのゝ道風をいゝふゝて芦をゝこゝやこの人ふゝ部ん

まゝこゝやゝる人佐方ゝ。琴をゝ弾ゝん。ゝいひゝ。ゝ佐て撥

ゝる乃ゝ乃ゝとゝふゝ。ゝけゝてゝ。ゝぬゝ。ゝけて。ゝぬゝ。ゝ乃ゝ

ゝいゝるゝこゝをゝゝくゝて。ゝこゝをゝゝかゝゝふ

ゝふゝあゝまゝるゝぐゝゝゝるゝぐゝゝゝとゝゝゝ君ゝぐゝゝゝふゝ琴ゝ

論語をよくよくなほいぐ小人不知而不温とゝ
よふもとゝ為ぐれの為のつくゝる人ハよくゝ
わこゝの信ちは。この國く来まて宇治の黄檗山まて作まる
詩集ゞのとゝて。
かゝこゝる人ハ國ようるびまて世ハ代おとこの業
故君南洲院殿ゝ むはゝつきの十ようひ。そうるかゝれるゝ
こゝなるゝのこゝろさハざハ。ちぐゝ世ハ代ハ
さぶゝうて候。
をゝゝわるゝぶハ志ゝ伝こゝもこゝろを学ゝ世ひるせも
そゝゝの人ハかゝぐれるゝ世ゝゝ月ゝゝ。をぐひゝゝ志ゝ

さゝゝゝゝ。ゝゝゝの山ハ世ハ孤のゝゝ。世のひゝ世をまて。
ゝるゝる道ゝかるゝゝをゝれゝ世ゝゝこゝろハ浅ゝゝゝ
世ゝゝをゝゝこゝろもハ。ゝの世のひをぶゝれゝ。ゝを世ゝて
こゝゝゝれゝゝゝ七十の世ゝひゝゝゝ世ゝゝ。
かゝゝれゝ様ゝる君ゝゝひゝゝこゝゝふゝゝゝむゝゝゝゝ
平瀬長旅といゝる人ゝ。その事績をゝゝひ。ゝゝゝる物の林業
累塵集ハゝゝれゝゝをゝゝて。ゝゝこゝひのあゝまゝる。
ひゝれゝゝゝゝの業ハ様ゝゝれゝゝゝのある神ゝる
花のゝゝゝゝ。
世ひねハゝゝゝのゝゝゝゝ山や義ゝゝゝひ海

[illegible]。

夏ごろいろゝ海ふきわたり風秋ちるかぜのきもうぐ

月おもしろし。

のれいづる月ふえハとゝふものをゆるくしてゆのくゝ雲

ゆきもなし。

[illegible]

大淀三千風いひ（一忍齋）ハ寓言堂と雅号。伊勢の國人なり。俳諧をよ

くゝとして学ぶ名あり。和歌をも[illegible]。元禄十年の二月。西行大

五百年の忌辰ふる由ゆゝしく。

いたゝくゝ胡蝶のゆめ[illegible]ゝ[illegible]の世に

中下ふくべ

相模の國略之澤の春夏秋の詠ふ。

梅はゝ略之澤ふゝ[illegible]

五月雨ハ[illegible]

[illegible]も[illegible]略之澤のゆき[illegible]

定月和尚ゝ[illegible]上ゝの俳（宇佐世）ふゝ。[illegible]

時阿[illegible]

遠磨の三[illegible]

ふゝ[illegible]

[illegible]

鈴[illegible]

（この上人ハ明和七年青[illegible]）

[illegible]ハ[illegible]

をぢろひて。道の大きをもかぶ知るときこゝろ。その人は僧侶
うた。

夢の世にそぐいひあはいはるべのこゝろを多ふ。おどや
れを同じ人ふこゝろをもたれぬかくよるる
ゆや。すふ者でかくよしこゝろひれて。おれぐ世ふ
ものゝこゝろいひこゝろ。ある人の語りふ義この時旭菓来
いけるこゝろしぶぢやおこゝろ。海こゝろづきこゝろかこゝろて
ひて国こゝもこゝろこゝ。今はくこの称呼はしるこゝ有
ふ深こゝあるべこゝ。この事駿臺雑話ふこゝあ除も同じ。
室直清ハ字なを師徳。一名字ハ海玉こゝ。通称を新助鳩菓滄
浪ぐ編をこゝ享保十九年七月十七歳ふて身まかるこの人は有名
ふ有こゝ

あはちれこけ〜海をこゝの〜ふ咲こゝふ〜ふ〜ふ〜ぐ〜ふ
ぬこゝれぐこゝあやはやまあを名良はぬ咲もしがむも花のまこゝと
こゝろハをむこゝぐ名ぐで朝名は松ふ名ぬこゝこゝふ
かこゝこゝこゝこゝ。ハ鳩菓を松ふ呆こゝ鈴木氏ぐ道をのこゝも
あこゝこゝの人朝鮮行こゝこゝこゝぐこゝこゝある称呼ま
鈴木氏ぐ僧こゝあこゝ人のこゝふあぐ
あこゝぐこゝ花一こゝこゝもこゝ松ふぬこゝこゝもかこゝ
このこゝ意味ふをこゝあこゝに行むこゝこゝ朝鮮をあこゝ

多くねども大かたあけくればねがふる事をいひて。枝葉あれをとなふ。
世はかなきことを書とめるを。題目とかくもいへど。いま松永が松に
かくよみ人しらずハそのほかにてかなふべし。翁ハ歌に道を聞て夕に
死すとも可なりといへることをおもひ侍れ。歌に心を尽して目前を捨て
こゝろハ歌がはおほよそけふは性なり。世にハ千とせふる松さへある
に。是ぞこゝろざしをまもりをえて。いづくともおもはれ。外をしらや
むこゝろ。歌をよくいとこゝろもよく人事に嘆て。さけゆくらむか
性をはなくして。枝はこそ花のこゝろもまてあれ。いかであはれ
たるべきことをねがひ。松もおもしろきかな。胡色はなるまじくして。一入
そのこゝろを書きうつし侍るなれど。松は心まかせて世をすてる。歌点の

こゝろに一日あり。されどたはぶれそのかみ性をはなくまてこそかくもなかりしとなる
らバ松はかゝるを業とせんも。歌のおしへ一日とこそいへるものぞ
みる人はわすれめかり。松は歌がおほこゝろ何をあらん松永氏のこの人
にならひまねしさまざまあらそふにもとめてかくハいかにかりけるかし。翁も
そのうつれるをひてあるとて。

河瀬菅雄といひし人あり。よむことをこのめる。元禄のころの人に
て。その世は歌人あまたありてあはれめて松永が草にふかくおもひを
りゐれそのこゝろにこゝろの歌をもおもはず。藤原信昌が権(?)
の國にまうでけるによりて参りけり。
かれもありしこれを雑波くくこゝろさきありしおもしろきことに

信易がかくふ。

之かゝるものなるべけれども殺伐にはあらざるのうまれなるべし。

服部元喬、字を子遷といひ、南部の人。芙蓉館と號す。俗稱小藤次郎と云ふ。ある時、伊藤弘法に仕へられて、品川のほとりの表に別莊をかまへ、元喬をとゞめられてありしなり。

是の地に行くるふ事ぞ。時にあること。

之はこゝる地のうちを水戸の藩の領内にあるの故なり。

松平甲斐守吉保の事。三田忠長の遺孤のこと。如是本末究竟

等はこゝろを。

そもあれば却てあるも又なければなきにつゝまれる心悪しき

ものは松平甲斐の西ぐちにこゝにセむるをそなふかけある

山名義豊は通稱を彦人 こゝに後世に弟ひ世ふこと。

してある故多くは元禄七年十一月十四日なれども人名

かゝる中山道行入道こゝにこゝろ。

のりくよりてはこゝろ

はこゝろ校之れ。

板鼻検校こゝひ、宝永の時の人なり。

て信濃の國にまて山に山をこゝろ

選ばれ検校ふこの名は自をいとりかんとおもふ

こゝあべ

我こゝろ〳〵あつめつゝ文料や艸ぐさとて世にてる法さをえず
しかつゐてりじをのぞみて。かしぜんにしたがいて無あることなりけれど。
ありけるによりて出でけんよき。あるかにをまはりめぐりてある人は随
業にいとまかの抄ふむぐてしるしいつんまりいでめづらしき無あまた。
京極なる門は。通稱を云郎といひ。三嶋軒と號せり。いとしき歌よみにて
元禄のころより世にきこえける。家の集を曲好集といふ。享保六
年二月十七日身まかれり。されど祖先佐々木氏 源宗氏 の歌をあつめて
續千載集に入れし時。いふしきの歌をあつめけるを手にふく
そのあらし名をおこしけるもよくあまた。この歌また新千載集にいるけるに
こゝろとかのなるつかひいるし。獨述懐といふ題ありし。

あしかめし。よろこびの歌をそへあしきせつかくなかけよ和歌の浦波
また元禄八年四月七日父宗の飛鳥井なる故。三十三回忌辰の追善に公
家武家の人々にすゝめて二十首歌よませ侍りけるうちに。心念不空
過といふ文のこゝろを。
そのかみのけふりもいまはなかき世をねむるしきは誓ひなりけり
湛水和尚の前よりも侍りし三首のうちに侍郎公といふことを
まなこも花に庭の色あるゝゆきをふみしへひらにたれ
磯田正隆は通稱を卯右衛門といひて京極なる家の自永服なりし時
人にて中院亜相通茂卿の門人なりしこのところにあまたあつめて
三翁水言集といふもありけれどうちにたちの家の名がをきりし正隆が作に

もどめてゆきて新しく作りもうけ。歳暮れぬとふことを。
種まうける人はまことの事も物のまことにて年はくれぬ
正隆のうた。
としくれの後はうゑの雪もいきさかりのひを松をまとん
又る門ぐ家まで。冬の雪〳〵作りもうけ屋風ふ。雨を正隆。
けつてせはもはもしらぬ代かいもあふくもの門のうるさはけき
永仮ぐうた。ぬさうう越後の國ぬ切むしてこ。正隆うう。
さくらん切まを散ぬ風もさるあしらは山乃さくひき
まま正隆うしまでこまでうるき。長郎ぬこうる新まて。
さてしまつくやかう園のうるまうる風ふうりうた

まま。うつう家まで。月隆ぬ會ふ。萩をとめる。
夢うけはまうき流ぬねうもまてこうはるはの下萩
うつう萩こうる新をえくまるうた。
つけゆもうさうぬ花さうつう萩戸の秋ふこうぬ
石野廣通云。人以て。萩の戸梦中のこ。今まんいうあん。
みうこまる条極云新うつ。中院通茂公ぬつ才まて。戸みうう
みうう隆人うう。通茂公長ぬこうぬ欲今ふて。墨田
川欲今名ぬ。東園入道大納云基賢卿。法名常泉。七十一歳のこ。
判切とふ。この基賢卿。中院内府通村公和歌の門人ふて。先切の
欲ぬこうう。この萩戸のこ。角田川欲今第六番たう。判切ふ

萩の戸ハさけびて入るましき秋ならし。かくいひもつてまかるべき事にこそ
して勝なるよしなり。元禄十年のころより其の御代和歌はやりたる
とぞ。此道茂公なり。判ハ基熙公なり。されど人ハゑらびつゝありて禁
中の事なるべきは御法なし。又松井幸隆がうたに禁中月。
雲のうへはなかきの月にあかぬかげ清きながれをこゝに汲まれて
通茂公あはせられける。近来禁中の事地下よりかへて言ふ事ハいと
あまる事にしも侍らん。明和のはじめのころある人禁中花といふ題に。
萬にさかえんこゝのへの花いろいろにさかん
為村卿まいりしてこの題なるべきはいつもの事なり。此歌ハ花にゆく書きく
ることの歌藻に見ゆれどのこよなくおもふん人ハ。育人なりとみのこゝし一笑

事としるべかるべきは御法あるやうなる事にていかゞせんと思ふしこの御法近
来のことしるくし。依て記之。又云、の事ともハよくかなふまゝに。猪名部
草に堀川次郎百首明和六年為村卿点あり。江戸門人御之。この判相あるも
林直秀ハ美作守に仕へてありしとき、ゆゝしき心ばへの人なり。その集を
竹窓集といふ。享保十六年十二月十六日身まかれりけるその前書に云
なつかはしひて見ころにあつりしと名しくさいざなひはしめたまひのばいざの
名とひしに病をたまはりていきあらんかへさらんとするところ。これ
春花見ずて身にみもしれぐさよりしといひしに二月の中の七日に身まか
まかれハかくいひてはかなしける。
さくらのちる花もあだの世をさかて又こん去と思ふゆふべかな

梅はなほさらぶ。

いろ香をたづねもいとび梅はなほ人みるまでうき

栽花をる所にて。

行くも時ふるとくとつぐれて春はなほうとをとぶらふ

海を病塗を

うつろふはひるまはあたき山くとふかはのまだ冷き

度の薄を

行まもけ尾花ぐ霧のそまとあてあるぬやの秋風

朝野分

ちるまでたちかく花を見ふたいどのかくれぶかはまつ

月前雪

ふりぬぶくわれこそゆめかるる雪はひるまやいん

忍涙恋

よるとも涙ゆるまでのてはなれつる神く人をこそ秋

述懐の心

そこらねをあらはすぐ道をいでぬ道をいでぬど

なるもかく世ふこころはをうさを同じ人をはれる身で

この人はひとをたやかるる海と亀極る門とるは美作る亜

秀百首ふこそえを作りれるかるる云第をかるべき

よいろひとそてるの奥ふかき付作るる

ゆゑよいろ〳〵咲る花の立ぶりをつきて発句かく〳〵

亜秀のかんてふ。

花ちるぬこゝのゝまもたゝひぬまろ〳〵かけて発句

いろ〳〵者少やあるらん。雑俳の茨川柳なども。櫻咲〳〵いる有ぶりけ

るゝきゝをとゝてしゆゑあるぞのるけるひ。いまゝふつゆも

ゝあをぐるゝ。なのゝぶ。栗ふ鶏のゝ形目貫をかゝふけゝ

ゆゝやゝてゝてゝるのゝゝふけゝるゝふぬ如けるして。

冬ひゝ帝ふ〳〵ふ負あゝれるゝをゝ門ゝてゝぐ

これ高保ゝるのゝゝるゝしゝゝてゝあゝんけいゝふゝ謡ひ

ゆゝ文句のゝるふ。ゝれ月あゝのゝゝぐふ。ちゝひゝぐ

るゝゝいるゝゝあゝゝ。みゝゝもゝれゝのゝゝをゝりひあゝゝてゝよゝし

ゆゝゝゝゝゝゝゝいゝゝゝゝゝのゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

あゝれゝる事ふ発ゝ論情ふゝうれゝる。

何ゝゝゝいゝひゝ童。九歳のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

住吉ゝゝゝ姫松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝをぬけて。家の集を尼深集といふ。中院家の門弟ぞ。

花とよめる。

春ハいまはぐるもるゝ心ざしいつかも音ゝ聞くゝ

ゝ。ぞ人のこゝろふ。

夕くれぬ音ハこつたへぞ出る風ふまゝ海れ雲

月花雲を。

夜さむなる風ふぞよる岩ゝて余ぞうきまつむの夢

月花迷惑。

ぢのこゝろ物ゆりふん月ゆくゝを行んをあて むゝふ法さ

本枝を。

野ゝふ山ゝ花ゝ花ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雪ゝ月ゝ雪

文禄のころ世ふるとて弥人くてぐそのこゝハ多くもさぶ。
圓珠庵とゝる。上野の國沼田が里の産ふて享保のころ人なるうれ
がゝゝゝゝゝゝゝ。

芳儀のいとふくてけてちる月をひろふるてかへるゝゝる
とよゝるふいけゝゝ雲ふくてゝゝゝゝゝゝゝ

有賀長伯は故齋藤平間長雅が門人なり。元文三年死す。
ある年の水無月のまばらに。加茂の川辺にて。
蛍をとらんとて。人々集りぬ。
かかけり。
こゝのそこらは水ふかむもあらじせもろゞせはのちづき
なるべし水石瑩々として影をうつして。岩もさゞめきのうつり
あひたり。
そこらにちらばる絶壁石川ゆるぐ事あるべし
ある時花の井迄一位のすゝぶ公あそばしける。本の名ナシ
そこに歌はべりて。あるもよむべきやいとれるけふ。
あはれとも思ふもとくるは海水は陰ふかりそこ。
やひとなる下はかりはちぐれたる
なるべくは恵のこゝとあるもそれぞ。
かゝるひとちらばるきはさはれ
あるべし京より浪花へゆくとて。夜舟のうちにて用をゆゝ
しきものゝ。人の後列をしものゝまでこゝるめをと人ふかをめ
ゝれかゝ。
そこ浪のかゝるとてふまさてそのふ淀の川舟
あるひはこの歌は長崎のあるうち。いとれるまゝ。
或隠者の伯いとゝ。ほゝみをるこゝろ。ゝる具。
調度なるぬをとゝよこゝかゝゝれぞかゝゝ清。

よるふこれをうつしてこゝにとゞめ侍る白浪に
信濃蓮八名を遠空にいとゝ。伊勢の國に人にて宮田流の信ゝ。
ゆのゝ院ふ信をゝ。ある時ゝ信信をゝ。ゝゝふ感慨。
世間ひふをくさるゝ。一封の書をとゞめ草衣ふあゝ。思ひて
物を弟ふ行ゝ。嵯峨のゝ。ゝかゝふ信ゝ。これ合掌を開ふ
ゝゝふ。物をゝゝ。ゝのゝあゝゝふゝをかゝゝ。
ゝひふゝゝゝいひもゝ。かゝて喜華のゝゝ。人ゝゝびゝゝ
ふあゝ。ゝゝのゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。ゝゝふゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ。
美人の髑髏をゝる僧の贊ふ。

朝夕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ふ鳳をかゝる贊ふ。
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
浮本法師ゝ二宮院の坊をかゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
かゝゝゝゝ事ゝゝゝの勤めをゝゝゝゝゝゝふゝゝ
めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題さびのこと。

[illegible]の月[illegible]ほとゝぎす[illegible]

興遊未央に[illegible]

[illegible]

谷崎句當永律ハ[illegible]の人にて。湯治[illegible]

[illegible]いと長ぎ[illegible]初[illegible]

[illegible]享保十八年[illegible]

一日七十六歳にして[illegible]人こゝに朝鳥をこのゝて[illegible]の記

[illegible]世の人朝鳥句當と異名をとゝぐ。

霞関集[illegible]

[illegible]朝ぎきに云。[illegible]あさ鳥を

[illegible]

[illegible]

[illegible]朝鳥の[illegible]

[illegible]

宝暦年谷崎句當[illegible]

の[illegible]谷崎句當[illegible]

[illegible]人[illegible]病を治療[illegible]同郷迫藤の家に病患あれば。

かるがるしく師をさしひ。遠くぬくうて。余が草庵も師のごとくまかり
ぐりくらう。衰老多病のみなれば。ふたゝび師をまねくに。師
ふたりてこの患を形ひしうして。ゆくゑをさだめず。師ひと
りわれをぬきてある物ゝ。ものふりうの仕くるを人ぐもあ
やふみて。さしぐいやさうるとれば。余も陽てうぐ。ものいひよ
りて。ものやまとやまとをふるうぬ。余ゝ同じるどのゝしひろう
しが年中仏ぐ。物ゝうゝうゝ。けれども使るうしふこどの
杖ゝうゝ。ふハふ中風のつぐひあるゝ。さてやうれぐいぐを
まりてもうまりゝゝ。ものひゝうぐも。物多も山之ゝ。之居もかる
ハ。花ゝあるゝ。ものうゝ。ものれぐ。ものうぐ。ものうゝ。少人ゝてゝゝ。ものうぐ。ものう

ふゝうんをうるかゝてきのふりもうをきるうふぬ。仕ゝ。ぐぬ。
花鳥川の流ふうんかゝうけ。ものうゝ紀あうふ梅ゝうるものつぐ
うゝゝうれうゝ。ものうぐ。ものうゝんゝ。ものふゝくゝかうう
うゝ。ものかゝして同ゝうゝ。ものの手もゝえうれぐゝそのうぐ
ものをゆひふゝ。ものふゝ。六月十日。ものうるふゝ。ものうゝ。ものまうう
めうゝゝうて。ものぐゆめれやゝれうえゝ。ものうゝ。花の涙ゆゝくゝう
うの悔ぐゝ。ものうゝ。ものうゝうゝ人ものゝ。師の辞世ふる
ゝて。和歌二首うれけゝ。ものうゝ。ものの紙ふ。
ものまでもつうを来ふる世ゝ申をゆゝくゝうゝ紀為ものゝ。
ものゝ部をものうゝとものゝて。

[illegible]

見るもけぶる道にて。今はふかき
あれはてゝいく度か傷るとは
さてもあるべき世なれども。なほひいたれば
地にうゑふやうにぶやうにうんもこゝにうゑられた。

山川城郭自依々。空恨遼東鶴不歸。高唱尚餘郢中曲陽春白雪

濕人衣。

舊宅人亡異昔時。唯看明月照東籬。秋風未散無窮恨。莫遣鄰家

笛裏吹。

いとゞ世ふかくなる人は西うけを傷ふかくまとゝまれるこゝろ

まさかるる時。かるくぶしのうくぶ。心をしやうとし。傷ふやさし

くもまくく。且は陸奥のこゝろもでしくぶでうるまもなひ

さまくいくぶありれと修くうるまかくなむ。

うくくしひうるむ系ちくは世ふ中ふ系をはらひさこゝろの系

享保癸丑の歳秋九月二日。七十六翁。鳩巣子人まを路東の

草庵のこゝふ樓くさくく記。

鈴木重規。通稱弥左衛門。はじめ。後入道して直庵と称ス。

ふるくれて。わかをもこゝめる。家の集を自源集と號して。

巻めくこのこゝふ。句當永律。新ふこゝろをよせて。

ゆふくこゝ。あまもこのこゝろぶかくをつゞまて。新うの

記し名ばけつの草稿を摂うるを清書せんとてこれを
しふしつかまつりしかばかくて。
あさうらし　紫のこゝろ　あさうの花も　桜さく
こゝろいと　ゆゝしくて　夜ひるなく　はなかひに　ゆきてこそ
この歌ふ乃　ゆれうるいろの　あふれて　人はこゝを　さる人は
さぶらいて　ひるの位の　宴の戸乃　紙の垣根ふ
くらまも　身はさぶらい　月はあさの　この歌ふ
さぶらひて　まさぬも　ちやふる　神の御代を　かけまくも
かしこき世ふ　うゝふ　ゆゝ　桜さく　はゝ　花の歌
光をとゝ

反歌

数々の花ふこゝろを歌ふ　この歌あるやさえ
永律がかゝしふ。
あさうらはさらぶ　君がこゝの歌ふ　花ふ　光をふいろもこゆめと
まごびやしこゝふ　ふゝて。ゆゝ　一首。
大うらはあふ　あふぬ水くゝ　ふゝ　世ふ人も　こゝ　ふ光
この重線ふ　ある雪ふ。
降ゆゝふゝ　松ふ雪ふ　ゆきうくゝ　やどてこゞれて
このこゝろ　世ふ　ゆゝをふれ　こゝふゝ。永律ひ百重線ふ
雪ふ。ふゝふ　ふゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

ろむ古をもいにしへあるれむ。つゝ他所もさきんひ。そさ物のゝ水
あるもむ。古を酒浴るどゝ。ものゝ。ら枝の事ハえゝりるどゝ人有ハ。
ゝぶあむ。つゝものゝ。ゝ。ゝ。

うち枝ゝよゝこゑ秋ゆくふるゝかねのをとをうらゆゝし。

英信香八（字を君受と云ひ）蝶ゝ歸ひぬ。ぐゝめ多賀長湖ゝいとまゝ晴雲ゝ稱し。畫事ふまぐれゝこゝハいとも寒ゝうゝ。俳諧をもまゝせゝ。

（北窓翁ゝ歸ひ。）

（享保九年四月十三日ふ）

ゝまかるゝ　時よあるゝこゝて。世ゝ人の口ゝ忘れ。

園女ゝいひゝハ伊勢松阪ゝ人ゝて。後園西雅中ゝいるゝ妻ゝ

ゝれゝて。俳諧の口ゝ居をゆゝゝこゝハ世ふゝる所ゝの惟中も一時肝

ゝて。俳諧をゝゝ。又芸事ゝきこゝあゝて。元禄十六年宵十日年ゝて。

ゝ老ゝ佛道ふゝて。禪掃もゆゝこゝうこゝいゝて。ある時雲

虎和尚ふゝうゝる事ふ。

来書ゝ迂闊見ゝ。不求真不求妄ゝ。大道ゝ根源。淫ゝ慾

物ゝゝうゝ。一心源ゝ上ゝの不作。柳ハ緑花ハ紅。只是作ゝて。

常ふ句ゝ。物を招ゝて遊ひゝ事ふ。無意の口業ゝハ。

一切經も無言ゝ業ふて。法ゝこゝ事ハ嬉ひゝて。我年ゝ

行ハ。合掌ゝ句ゝ物ゝうゝ。極楽くゝゝ。地獄くゝハ

目出度ゝ。

それゝうゝん法ゝゝくゝ有ふあゝびゝうゝ。ふあゝ法の絶

享保八年。ゝ六十ゝて。後を名殘ゝあゝゝ。ゝゝ。同十一年冬

六十ゝゝて。ゝ。我ハ七十ゝゝ。ゝゝ。ゝハあやまれるゝ。

世人ゝゝ。

秋の月春はあけぼのゝ[illegible]ハゆめゝ[illegible]南無阿弥陀佛

隱岐直清[illegible]ハ通稱を文左衛門[illegible]三浦[illegible]伝る明教の家人

[illegible]ゝ風流の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ少府の

一松又ゝ道拙ゝハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

藤田東湖傳を依助しいとまをしめ杜元房の藩士なり。松原
真徳が門人なり。俳諧をよくす。自かくまもりれいを世知
しるの八百屋お七なり。この人は俳を学びしとなり。
百六歳ふして。延享三年七月二日歿れり。法名を老樹翁貞
陸居士と号す。辞世のうた。
うたがはれうたがはれうかりつるものの水の音
この義国を真徳が門人なり。しかるに物ごとに真徳は兼意二年
小死をなしいとはしくまをなし。この人や一度十三歳のころ
の事なるべし。れいのまるぶみをしてきたる。
谷口元淡は字を大雅といふ。松平[illegible]の人なり。百人者

拾穂抄は補注なるべしあり。この人は多くかなり。
野雪といふる題をしてよめるうた。
かきつくしふるもうつもれるあるうきふる降る白雪
義京信易が母は元禄のころ人なり。れいがうは布ぎれいい。
むつまじきる人はそうかうみ。このむきめはそうかう
ゝもおもはるるぶ。つかうゝを香を一ぱいをこせるうた。
むまえは方へ傳へ。ぱいをこせる。
いふもん身をこうる。煙草をもあるふるかすひを
拾遺抄といひしもの。ころの人なり。
此心伝は之れの假名抄かさ[illegible]。奥ふかき[illegible]

ふ。

この事は世間に風説まちまちあるべし。横はまの駅にて

ある時、人馬ともに乱れて、安藤の

こゝろをもつて、

こゝを海はまのうちにひまつ浦といふ。

遊女浦尾といへり。越後の国はまのうちにて、

がこれいくばくかの人ぶあるべしとあるべのいく

をきゝ入れぬ。

遊女をとゝかふまつる浜の川のあきら

ぶしのうた。

所はうをあけて浜もとめふハ心はやりの松ふかぜ

苅藻しをるゝ。ゆゑ国の遊女うつくしく人はすくなく

ハしるゝ。

こゝにしる人ふとゝや世はゆのこゝろにうれめるつゝ有やや

所はなどをかんまこゝろ。

こゝ行はのるふりしゆゝふ山もてゝ定めあるこゝろねふゝ

百姿ふとゝ。ゆゝ江戸の人まで。ゆつゝとゝて漂泊して京師ふ

はりる。真菅ぐ京ふ茶店をいとるゝなゝ。ひゝをゝ。これ和歌

をこのゝゝ集あゝ。早百合葉ゝ歌をゝ。かの梶女ぐあゝをつぐ

てゝのゝろ芸ふゝをゝれゝ女ゝゝぐれぐゝゝてある時むゝめ

[illegible]の花をみるとて。

[illegible]の[illegible]は[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

真如堂ハ[illegible]ぶむ[illegible]ふて。大雅堂[illegible]名が妻[illegible]。名を玉蘭と

いひ。曾覃居士[illegible]。画を柳里恭ふまるんで。世ふ名あり。和歌

[illegible]の[illegible]。[illegible]に冷泉為村卿の門ふ[illegible]てあるしが

あるとの春はあしき。若菜ふ梅を折るとて。[illegible]

[illegible]。落村々。

[illegible]梅のいろもるも春はこころの花[illegible]

又ある日まいり[illegible]時。真如堂ふ遊可[illegible]ふ名をうるもの[illegible]ふ

[illegible]中あるを蔵藤をそ[illegible]ふ[illegible]れ[illegible]の初は[illegible]

[illegible]ひふハ。中をふ[illegible]ふを。蔵藤をこ[illegible]ひて[illegible]

[illegible]。[illegible]ふ[illegible]。[illegible]人ふ[illegible]

[illegible]初の[illegible]。宝暦十年九月十八日ふ[illegible]。

[illegible]花いろ[illegible]の春はまこ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]人の[illegible]をめ[illegible]。

小山[illegible]中ハ。遍稱を之[illegible]。[illegible]。[illegible]

[illegible]。新樹花ふ[illegible]。[illegible]

[illegible]。

[illegible]花のもとにもふ[illegible]

一田付園方ハ後稱を四郎兵衛といふて。延宝はころの人にて和歌ふ心
をいれしとなん。夕立はるる題出て。
夕立はるるこの霧をまきれ月とかけたる新て涼き
陽田川のそこふあるひしとのこれ。
そこの川むこうをはふ波のよふすけうふやこうか
商人長左衛門といふハ大黒屋と元稼のこうは人なり。これ清
新樹こよ影のこれ。
夕日かけこふふいろはわつ楓こうの梢も枝ハこそ
俤は雲ハ。ゆ山をは如雲と之を。安藝の國廣島の人なり。佛学
のてまふ。教むこをこの。民者小坂実陰卿ふまるぐ。

名勝地こかこふあるこびて。さよむ日のこふ。名をはて。
俤ハ雲ハ。ゆ山をは如雲と之を。こうもこのこう
ふ。

西行ふをこふるこふハ俤はもこうハ雪こまこめこそ
これこの上人は墓和さぶをるびさて。石山の敢世善
薩ふつはをこの垂夢ふ河内國泉川をすこめはて。悦
びこふて唯行家こひろふ。このふ。さぶこうをは
を。ふはこうをを。こいろのこふあるこ肖像をすこめ出て。
手を遊ここびこも山ふ菴をむこびてこの。春雨ふ
ふこの時はこて。

[illegible]ふぬむうしれ人の[illegible]て仏川てふにてこゝめのそそ
その菴の屋さいこゝつづふ一畳二畳ふもさざれど人々そ
いまもこゝひろめこゝひろれぐ。
我いにそこゝも宮あひり雲けもこゝ居さふぬそこゝ物
こゝふあまこれ桜はまをこゝさせ。後こゝの山人くまこゝ
こて。春ふこぞめるこゝ。
はこゝくこゝあれこゝふこゝる心しぐこれまこゝるさこゝふれ下枝こゝも
こゝ延宝四年は夏のこゝ。頂蘆はこゝふれこゝる時久くく絶
こゝる塩富をはこて。塩やこゝこゝもむこて。
絶こゝあり[illegible]こゝかくをむものふ富むしれ竈の[illegible]

こゝこゝれむこて人のこゝこゝまてこゝふくこて者る頂蘆の浦波
かの再興をこ塩こゝる。又煙くこゝびこゝこゝれぐこて。
所ふこゝこむ入こゝをこゝ浦い尾こゝこゝの煙もこゝくこゝ波の浦風
人ふあづけをこゝ[illegible]こゝれこゝふこゝこれこゝも帰をのこゝ[illegible]の隅こゝれ。
仁木元長こいひこゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]こ

定家卿の真蹟長歌短歌。古今相違の事ども書をしるされ。
その時安達藤ノ八黄金百枚を傷ひしに。やがて冷泉為久卿に下
されしことあるべしとのことなり。又ある人のいはく。伝ぶし
の作ふまいまるふ。郭曲拔薄ぶでをされ。はくふまつる。ころ
しも夕月夜ころなれば。

ゆくすゑはくもゆくもゆくすゑはくもゆくすゑはくもゆくすゑは

久方の月やこんうゝ山ぢかねたうゝの雲のあること

松井幸隆ハ甲斐の国師の町奥方にて。びぜを善右衛門と称し。後

常方とあらためむ。鎌倉六窓軒にて。中院通茂卿の門ふかく。

和歌ハ為世ふうにて。うれゝ歌ふ閑庭春草。

菜ゝなる菜ふかくる春ハ庭人めまかるまゝ

對播問昔

いゝけるゝ神ふつゝむ花梅ふゝ

七夕別

ゝもろ〳〵ゝ織もあひをたゝ夕ゝ行をたゝふみさわゝふん

炭竈烟

ゝゝふわゝ山ふゝゝ竈ハ雲やうゝて煙ゝん

除夜

身ふけるゝ老ふゝゝゝもるゝ月ふゝ鬼ふゝゝあれ

寄徐忘

せゝゝゝ絶ぬ中りひのゝゝひふゝゝ絶ふかゝゝの煙も

こゝゝふけゝて。石野廣通ゝゝ。この歌徐ふゝて絶ぬ思

ひゝゝゝゝれども。幸隆中院家ハ門人ゝ。二條家流。琴の序。

ふゝの山もゝゝゝゝゝゝあるを。不ひのゝゝひふゝの

流をゝて。かゝゝゝ。宮内義正ゝゝゝゝゝ。

ふゝハ根の煙ハゝて消のこる雪ふ神代のひるゝゝ

義正侯ハ門人なれば和歌もかれこれ冷泉家深切なるよし。冷泉流其外序ハ中の山もとなるべしとなり。

ある人のこゝろにこの流をくゝてかゝるもあるを二首のつゝ

中院家冷泉家会題のこゝろ。

俗釣月も京師の人なり。中院家の門ハいりて和歌をまなび。

その名ハ宗さとし。後ハ人あるて除門をれしとて。和題

林集の作者なり。梅ハ和題林和歌集ハ行なりのハ是あり

とて。宗ハ宗ゆゑなり書なれ序跋もなし。作者の名

をもあらはさず。そ〻ゆゑハ延享六丙申孟春敦旦のこと〻。

京師の書肆もなりしゆゑ。そ〻ゆゑ京師の書林ハ名のこをあらハ

れば約月この書をあらそ〻ゆゑ。除門をれしもなぐ〻び。或

ゝの春。家のゆけ〻ゝし時よる。

松上霜〻〻なる新春。

伊藤仁齊名ハ維楨字ハ原佐。一ハ堂隱〻歸を号。宝永年中ハ多

ゆゑ門人ハ〻〻ふ古学先生〻注をそこの人一家のゝをこ。

この道をゝるゝ多〻。法ハ世ゆゑ堺門なゝしてゝ

れ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

このうたは弟ゝを。或本ふぢはら。江戸桜といふ。
もろこしの俗ふ。桜は花をこんぜいとうれば。海棠ゝうゝて。海棠
の詩を作るめてきこゆ。本弟の文を考へ合るに大ゝ海棠ゝ
又ゝをゝ。ゝるゝて。ゝゝ隠居士ゝ雅ゝあるひ桜隠とも
いふゝゝ。又かの集。枝の数はゝらふ。近ゝゝゝゝつゝ。世間困窮
ゝゝ。枝はゝうゝて野ゝのゝれゝ。ゝ枝のあゝゝゝゝ
ゝふゝゝゝゝ作るふゝ。人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
五月の十八日の夜。いとう暴風をふゝ。ひけ作ふ。
野ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

風雅行はれ業をうのふ物ふうもむさくぶのいせ
七夕を。
はつしふそぶひとあて方のこもひるさ名ぶらん
月をうぐめて。
ようをくうぐめ人は彩ふまいわれをゆを秋の月
戒慎恐懼のこをとある。
ひりしれぐこの身は外ふ道ものるを身をまるこて道を知れ
並河天民八名を亮ようひ字を簡亮と称を也。通称を勘助と云。
武八通称簡亮ようもてふ名羽横大路人ようと享保三年平
崇を身ようかれを。ようめ伊義仁亦ようにふあるとぶら一家を
ようを。國学をもて心ふ人ようと行欲ふ多くもようぐのふ
としてふ。そまるを人は伊ようるハふをのぶ故ようは多羽ふゆをて。
あこうをもはをぶふ春をとぶふるあるのぶ故ようは多羽ふゆをて。
こうある人ハを国をよこふ人はきるもをいふこうこん伊ようある
書ふ伊をを。
苗村必洞ぶ妻淑貞伝こうを。わをこと時ようふひをこのぶをる所
ふをこまれを。人は感ぶ欲あるこうをの内ふ欲をこび。
ようで校をとうふ時自は為るふて為業ぶ井ふもこぶあん
こうハを内ふうこう春ふけをこもかこうこを方ようるをこうひ
ををぶようひて。連歌の一句ををこうこ節ををめて伊ようをるる。

もらうとゆくとて悦ぶべきさくる日ゝ雨。
この時よりあるこれ。
かりこるうれしきものなりとて夜を明し新ぶ行を
八十六歳の時多くあるうんとてかくこある。
あまり舟やそのこうこを漕ぎてかけきう近くるるべしと
佐藤直方八通行を立命花遊こしひ。剛齋ゝ弾を。山崎闇齋乃
門人ふて。ゆつくゝ行集の学をとる。彼文は口ざいさうえされど。
学ぶ者とのうる。それがよあるうこて。[享保四年八月十六日卒去]
ゝるうん人ゝうれでそこまゆゆゆゆ代のある道あゝを導ねて
これも道まうびのこゝゝまうゝ。

澤市とひゝ盲人ハ大邦氏うる。佐藤直方の門人こうして性理の
学をまうびりでこの学ふ西をゝ
しぶゝゝセかうこゝふかゝるも。毋ふあひゝをかものるう
年を経てあいはふうけぐこ心こ行こうこけるあひやある
うのこうこ海のやちゝさを。人ゝ感ぞこうる理。
手車の翁こふハ京ものゆゝ。享保ゆうをめ。手車を系ゆてまい
ゝて。是ハそぐけじやゝゝんぐやゝこうれゝを伝のじやゝこうゝ。
童ぐもあひくゝまてあゝる後こ経彼のうれひさてこう事
京ぐうゝ。ゝいふゝある家の軒の下ふ端坐ゝて走をもかゝ
ゝ下ゝちいさゝ卒都婆をゝゝて。

をぐるまのめぐりてゆきてふるさとの卒塔婆はこれをなげかしや、
しかるにこゝに奇人とゝぶべし。終はさまも滅のはてをみ
ずうれずれば。ひとをなぐさめ。ゆくすゑ。かゝる世までも傳
らるべし。

雅義こゝひ八等之汗義竟して。有賀長伯門人なり。それ遊行
あるをもて義竟集と題せり。その序ふ。

なるべし世をよりやたけだけ言はれ義のおもてをあらはすべし
この人は遊歴をしたゝこの序久方のかしふをもて人こゝよみ
てもかりるべしれをあらためて。遊歴集と題して一冊あり。

江源こゝひ女。本姓ふじはらにして。大年寄をたゝめり。正徳
四年の冬はじめ。山村座の興行の時。よりぬかる
まひ多かるべしの事あるべし。詳しくはふれたるこの序をもて。
内蔵頭なるふめ。あげけれ。古日信濃の國なるをくすむ
をもてこゝにやはべりきこゝにこれふをもてこゝにあり。
こゝに。屋のうちをすひてかゝるよりあり。
さびしきはこゝハ世ふあるこゝひこゝのいまこゝやしさ
こゝに世ふハまこかゝもやむこゝ物の見おもえの新もこゝつ
このこゝ世八歳こゝ。

奥山交行院こゝ八奥医師こゝ。これも江源がこゝふこゝ
こゝのはこゝをこゝをこゝれを流こゝ
こゝにこゝよる。

なぐれゆゝ身八こゝ多おあれこゝ物のこゝ
同こゝふゝ。奥山之菴こゝ。法眼玄達こゝて。元禄のころ人こゝゆ。この交

行院の父母もあるべし。西行きこゝに来ぬれば。この人はもとの寂蓮
なれば。その門にて紅葉を見ん物とのぞみ給ふ。
惠心僧都の跡のこゝにて。

つゞらふそれたゞ川の関をこえて人はこゝろのあき風ぞふく

遊女惠山と云るゞ。人ふ十首こゝにあるこゝの
歌こゝて。

身はたゞこゝにおのひとくゞてこゝ見る附いはぶ新にある余ろう筆程
同じ世ふ義尊こゝふ。あるひぶ。ありふ。あるこゝにあるこゝ
わわるゞこゝろ。こゝろこゝとこゝこゝの首こゝふゞ意こゝ
筍齊こゝ云ふ。行齊ゞよこゝこゝこゝでこゝの実はこゝる人なることを知
ぶ。ゞあゞ名こゝて。新行狂こゝこゝる書をかけるこゝの人世おこゝるをもて

あこゝびてこゝふも西落こゝる時人こゝこゝ。ある時云庵の湊川ふ到る。
扇の芝をこゝて。新政こゝこゝをかこゝてある。
あこゝれこゝ八形こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ扇の芝はあこゝはゆ
このこゝあこゝこゝれこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

題とも。詩歌多し。その内ふ地水火風をよめる。

海原やそのしらなみかすまして国もゆさうんあらぐ春の日

あらしふきそそりたつやそのしらなみかぜなりはさいる雪もこれめぐりいでる息のそらもるさくらあらぶ春のよもすがら世の中はよもあらし山のあるかぎりはたいはさやうゆらぐぞうもうえび。

池田季澄。通称を武兵衛といふ。明和宮ふ。享保八年みやけはしりみちの日向国ふかるる。時分の国の宮崎郡彩下北村といふ所ふいでて。帰りなひいでこのあるふ。第居が出るでありやゆゆしきこののはふ寺移りふ。海法寺といふ。古き小寺の侍。

そこにむかし宗法を発ふ。石碑ふ建てあるもこと云。あるう迫れば。立ちてこの碑をえ侍るふ。ひこうの石八年ふしもおちうるを。諸国を遍歴の行者の前をもとうるふ。ぶんふ。ぶんはこのもとくるふるうぬ。されば迫さころ。ゆゆしく汲めばくるる。昔のこころうぬうれる。法名を鏡水居士といふ。ゆゆしふ。秋も主ふ侍ふ。淺茅が原もいろはにほへとちりぬるを。所ぶは第毛。ゆゆしき古るあれもまるもさうう。かるは行をもよくあんゆゆしも。ふまびひぬる事ふもあるもむうふ。ぶでもこころぬるの浪もあるこころぶもこのはれをつてれるこころりれば豊後国ふる。ゆゆけのこころけるうる系かるをぶこひゆゆひいで。

世にもくるまれたる小くらかけ清れてもあることろ
ゝとて。そもそもふるけて。かの石碑ゆゑ向ゝ
作ふの事もれて。春はこゝろかの寺乃れをとやのさる
事あれば。ゆりひ出て。やがて書しるめ。石碑のうまのうふれ
ゆ向ゝ之さんとや。事はこゝろ。みやもあるてんしゝへ
る男はよのはね人ゝをけるゝやもとして新色しま
ゝをいをゝ清みて。酒ふゝひる人はゞゝ。今ゝ。落
人もゝをけゝいゞゝをゝ来るもをゝをゝてのゝを
ゝてゝをゝる事色めゝれ。吾そのゝて。ゝん。ゝゝゝゝゝ
をゝをゝゝん。ゝけゝて。ゝこの寺ふゝゝゝる。十三

ぐるみのゝくふかゝや。屋ふ砂ゆをかゝるを。ゆふゝしゝゝ。
ゝのゝゝ。

ゝゝゝゝをあかけをよゝゝ後ゝゆゝゝゝれゝゝ
ゝをかのゆゝ門のゝくゝゝゝゝのゝゝをゝゝゝ
ぬゝゝん。ゝ人ゝみゝゝゝゝゝゝゝ。ゝ入ゝゝ後者やゞ
て豊後國くゝをゝゝて。ゝゝゝゝ。ゝ豊
ゞ蓋ゝゝゝゝゝ色欲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者小路ゆゝ。ゝ陰ゝゞ。ゝ哭ふゝゝゝ。ゝ明和六月ゝ。三月十四。
この系譜の記ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

小公蔭にある人は所持する京塚の記念の文をもて行るに。
[illegible]
この事ある人の酒菓子をすゝめ奇怪のこゝろ[illegible]
[illegible]
志賀郡原山寺の書の巻[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
清水宗川[illegible]
[illegible]

かけてうゑる春とあらしに
有る重房ぞ[illegible]山名光豊が[illegible]月のうゝ[illegible]
めぐるあひ[illegible]
松虫を。
はるる秋をも[illegible]
歳暮を。
なをさゝふみのひしりはいとせも老て八[illegible]
恨恋
[illegible]
[illegible]

なやこいぐさしげりさきこるものをたどの宿の別れ
留主の山と。
ゆづれば和泉國を隔てうしろもゆかしき雲井なる
和泉の堺ふるまつ一葉子。ゆく九ふして月ぬるるよ
うしろ。
春さめて月ふかみ花をひとえぶんふるあふ
昆田出世ゆめ。第はくれ。西波住を一時の秋哀。
さつる身の宿ふりぬ去年の むかしは君ゆで匂ある
こゆうやんこうさかう(さうあけうまふ。
しふるのうしこまるふ。

去さ一面は道ちぶちふいふしてかる言葉はあやひらん
立相不角、後千箱し稀し。松月堂一歩ちる。この人ハ祇徳ふ長ぜ
をりて世ふろれ。ふふ長寿のさくある。宝暦三年肯世四年
九年二ふして身まれる。(武八宝永三年肯世ふてふものいあやまれるふん。)それぞ戸田茂睡ふ
かくれぬ世さぐふ蔵るもぐ中もこうふ月ハちりぐやさむ
阿部遂良。遂稀を三年ふ遂ふ。大雅の組ひさ。和歌ハさぐめ
中院家の門人ふ。後ふ九家ふ黙をこうる。花盛(御)こうる歌
ゆ。
春風ふ匂ひぐある梅花ハまぐ。きちうふの春のこうをと
郭ふのうた。

百年は春のうぐるまも一夢ふつまれてぞうつ山りてぞ
河原を
行かたなる新もぶれてまた掉の雪ふやどる月の川ふね
冬夜夢
月さゆる松のしのをけやでもとぶぬゆめはみぞうつさ
深夜恋
待ひ行うつまぞあいまはて枕るまも稀れやまる
享保十年林氏飛る直秀七十ふあまるめるこうまやもふ新のま
ゆされ行れぞ。
今まれ代のけ未身をやけ行ぐき影ぞ光やまれむ

直秀のかくしふ。
先て行ぐ行れふ行ふ稀ふ婦ぐき身をて雪むむ
石野をなる度毎のふて雪散風。
巻あまぬこれの光まふふきふ入て風の行傷をふふ白雪
知見院八幡宮天神の社社列高ろをふの名をうびあるこ仏
洞くこをふこれ。
これ夜の一時をそれをそれふ山の縁ふて月い入ある
やぐて時ふりれふぶふふも傷ふれて。やけどここのよ
しあるて。
一時はれれ切ふ春は夜ふ巡のこ巡月をいるぬふ

栄安しとてるぶ。ぜんぜん布施孫兵衛細川。相沢宇蔵とひ
光のむとめるるとしに十六歳ぶろうしり初詣をこのそ。なりたれ
てよりるるるるしとある所の話ぶ。
まるとくをしぶろぶ話しをの寿ぶ命のあるをゆるも
りくよるるしぶ。親ぶ道を聞てタ原ぶ死をも可之る布みち
よるるしと。芸の人ととてるぶ。ぜんて作るとのあるるとを
て。他量の所る殿利根姫君くを見ておされしぶ。父親の名を
あけしと。或書ぶ話をあ。

国立公文書館
National Archives of Japan